

エジプト学研究第 20 号 2014 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.20, 2014

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2013 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第 19 次発掘調査－	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・西本真一・和田浩一郎	13
第 6 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合 望・高橋寿光	43
〈論文〉		
エジプト先王朝時代の穿孔技術に関する実験考古学的研究 －フリント製小型ドリルの切削能力と形状変化の観察－	長屋憲慶	59
〈研究ノート〉		
クシュの碑文を母系制として読む －即位の記録と「アララとアメン・ラーの契約」－	齋藤久美子	83
エジプト先王朝時代における石製容器の地域性	竹野内恵太	99
オブジェクト・フリーズ (<i>frise d'objets</i>) と出土遺物の比較 －装身具およびアミュレットを中心に－	山崎世理愛	115
〈動向〉		
争乱の中の大エジプト博物館建設と文化財保存修復をめぐる国際協力	高木規矩郎	131
〈活動報告〉		
2013 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		145
2013 年 エジプト調査概要		149
〈編集後記〉	近藤二郎	155

The Journal of Egyptian Studies Vol.20, 2014

CONTENTS

Preface	Sakuji YOSHIMURA.....	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2013, Project of the Solar Boat	Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA.....	5
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Nineteenth Season	Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Shinichi NISHIMOTO and Koichiro WADA.....	13
Preliminary Report on the Sixth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition	Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI and Kazumitsu TAKAHASHI.....	43
Articles		
An Experimental Approach to the Drilling Technology in the Predynastic Period: Cutting Capability and Reduction Patterns of Flint Micro-drills	Kazuyoshi NAGAYA.....	59
Reading the Kushite Texts in the Matrilineal Context: Enthronement Records and the Covenant between Alara and Amen-Re	Kumiko SAITO.....	83
Regional Variation of Stone Vessels in Predynastic Egypt	Keita TAKENOUCI.....	99
Comparison between the <i>frise d'objets</i> and Burial Goods: Focused on the Ornaments and Amulets	Seria YAMAZAKI.....	115
Report	Kikuro TAKAGI.....	131
Activities of the Society, 2013-14.....		145
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2013.....		149
Editor's Postscript.....	Jiro KONDO.....	155

オブジェクト・フリーズ (*frise d'objets*) と
出土遺物の比較
- 装身具およびアミュレットを中心に -

山崎 世理愛*

Comparison between the *frise d'objets* and Burial Goods:
Focused on the Ornaments and Amulets

Seria YAMAZAKI*

Abstract

In the ancient Egypt, personal ornaments were essential items among the burial goods, and some of them are mentioned in the funerary texts such as the Coffin Text and the Book of the Dead. The *frise d'objets* which was applied to the interior of the Middle Kingdom coffins also shows them as the polychrome pictures as well as the texts. Those funerary texts sometimes explain the material and position of the ornamental items with the dead, and it is intriguing that they are often found according to these explanations. Therefore, such funerary texts and pictures about burial ornaments seem to be a “norm”.

This paper focuses on the correlation between the *frise d'objets* and burial goods especially of the ornaments and amulets. Previous studies have suggested that the *frise d'objets* was the tomb-inventory or abstracted renderings of the ritual acts. However, I suppose that the *frise d'objets* is not just drawings of the objects, but at least in part, a “norm” of the burial goods and a means to show bearing knowledge of the ritual, which are needed for access to the afterlife. In order to know whether there were any rules in keeping the “norm”, the *frise d'objets* and the ornamental objects found from the burials of Senebtisi, Wah and anonymous lady were compared. There are at least 27 items listed in the *frise d'objets*, among which 15 items could be actually recognized in the burials. In addition, it is observed in each burial that there are very few ornaments and amulets which are not listed in the *frise d'objets*. As the results, some rule of performing the “norm” could be identified. Person of a high social position tends to be buried with a variety of ornaments and amulets as much as possible, while person of a lower position seems to possess a limited variation of the ornamental objects such as bracelets and anklets.

It is probable that although all the ancient Egyptian desired the ideal burial in keeping with the “norm”, the actual performance was depended on their socioeconomic situations, and lower class selected the burial items from the list of the *frise d'objets*.

* 早稲田大学文学部考古学コース3年

* Undergraduated Student, School of Humanities and Social Sciences, Waseda University

1. はじめに

装身具は古代エジプトにおいて先王朝時代より使用され、しばしば副葬品として死者とともに埋葬された。そして、時代が下るにつれその種類は増え、中王国時代にはラフーン (Lahun) やダハシュール (Dahshur) の王妃の墓からネックレスやブレスレット、頭飾りなど様々な装身具が出土している。また、古代エジプトでは装身具およびアミュレット¹⁾が「コフィンテキスト (coffin text)」や「オブジェクト・フリーズ (frise d'objets)」、「死者の書 (book of the dead)」など葬祭に関する文書の中で言及されるかあるいは絵として描かれる文化があった。さらに、それらはしばしばその言及と一致した材質や位置で男女関係なく副葬品として出土するのである。すなわち、葬祭に関する文書で言及されたり絵として描かれた装身具およびアミュレットは、古代エジプト人に共通して必要とされた物であったのではないだろうか。そして、もしそれを「規範」と呼べるのであれば、実際の出土遺物と比較をすることで、両者の関係性および社会階層が異なる被葬者の間には「規範」の遵守にどのような違いがあるのかについて知ることができると思う。本稿では、そのようないわゆる「規範」の中でもこれまであまり注目されてこなかった「オブジェクト・フリーズ」に焦点を当てることとする。

「オブジェクト・フリーズ」については、ジェキエ (Jequier, G.) による「オブジェクト・フリーズ」に描かれた個々物に着目した研究 (Jequier 1921) が現在でも最も重要な位置を占める。また、ウィレムズ (Willems, H.) はジェキエの研究を評価しながらも、一つ一つの物が持つ意味や名前の同定に終始して、「オブジェクト・フリーズ」全体にまでは研究は及んでいないとし、描かれた物の配置関係や木棺の内側を装飾した他の要素との関係性を中心に、より広い視野で研究をおこなった (Willems 1988)。そして、「オブジェクト・フリーズ」と実際に出土した遺物の両方を考察した研究としては、パッチ (Patch, D.C.) による下エジプトの衣装 (“Lower Egyptian” costume) の持つ意味とその変遷における研究 (Patch 1995) が挙げられる。しかしながら、一つの墓内における遺物のアセンブリッジとの関係をみていこうとした研究は、遺跡の報告書で多少触れられる以外は管見の限り行われていない。そこで本稿では、研究の出発点としてまず先行研究をもとに「オブジェクト・フリーズ」の主な特徴を概観した上で、「オブジェクト・フリーズ」と一つの墓から出土した装身具およびアミュレットとの比較をおこなう。

2. 「オブジェクト・フリーズ」について

本章では、まず先行研究の中でも特にウィレムズの研究 (Willems 1988) を中心に「オブジェクト・フリーズ」についてまとめ、その特性を明確にしていく²⁾。

(1) 描かれた位置と時代

中王国時代の箱型木棺は、特にメンフィス地域と中部エジプト (中でもベニ・ハサン (Beni Hasan)、メイル (Meir)、ベルシャ (Bersheh) など) では外側よりも内側に装飾が集中しており (Snape 2011: 143-144)、「コフィンテキスト」、装飾的に表現されたヒエログリフ (ornamental Hieroglyphic text)、偽扉 (false door)、供物卓 (offering table) などが様々な色を使って描かれた。「オブジェクト・フリーズ」とは、そのような木棺の内側における装飾を構成する一つの要素であり、多彩色で描かれた日用品や儀式で使う道具などの絵が並んだものを指す (図1)。それらの絵は、しばしば関係する体の部位に合った場所に描かれた。つまり、枕や鏡は被葬者の頭が位置する場所に合わせて描かれ、サンダルはそれとは反対側の足側に描かれたのである。また、時には絵だけでなく、その物の名前や材質、置くべき場所をヒエログリフで記したラベルが近くに描かれることもあった。

ウィレムズは木棺を集成し分析することによって、箱型木棺は「オブジェクト・フリーズ」が胸側に無い³⁾木棺 (タイプ1) とある木棺 (タイプ2) との大きく2つのタイプに分けられると考え、さらに両者には年

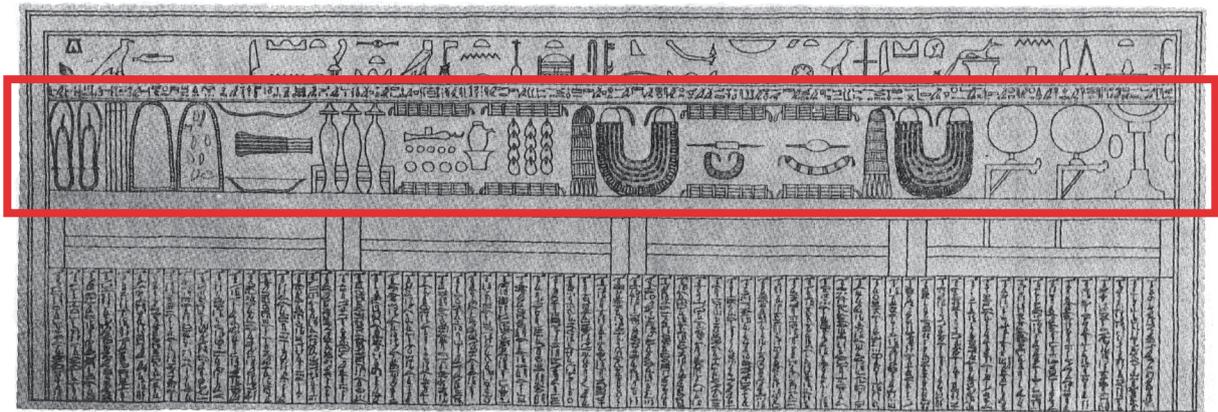


図1 木棺内側背中側に描かれた「オブジェクト・フリーズ」(Willems 1988: fig.26 一部加筆)

Fig.1 Back panel (interior view) of the coffin showing the *frise d'objets* (Willems 1988: fig.26, with additions)

代の違いがあるということを指摘した(図2)。

まず、タイプ1についてウィレムズは、古王国時代と第1中間期の墓や棺の装飾を引き継ぎ、さらにタイプ2に先行する木棺であると述べている。また、タイプ1の中でも頭側と背中側に「オブジェクト・フリーズ」が描かれたタイプ1aと、頭側、足側、背中側に「オブジェクト・フリーズ」が描かれたタイプ1bが主流であったという。タイプ1aの木棺は、第11王朝や第12王朝初めのものでテーベ(Thebes)やベルシャ、ヘラクレオポリス(Heracleopolis)周辺から出土しているがほどなく使われなくなり、タイプ1bがその後も継続して使われ、ベルシャ、ベニ・ハサン、メイルやその他中部エジプト、メンフィスから出土しているということである。

次に、タイプ2についてウィレムズは、第12王朝アメンエムハト2世の治世頃に登場し、タイプ1にほぼ取って代わった木棺であると述べている。このタイプの登場によって「オブジェクト・フリーズ」が占めるスペースが増え、それまで描かれていた物に加えて新しく描かれる物が出てきたようだ。また、「オブジェクト・フリーズ」以外の様々な装飾にも変化が見られ、タイプ2はそれまでのタイプ1とは明らかに性格を異にする木棺であるということが分かる。ウィレムズは、このような変化がエジプト中の木棺に同じく起こっていることから、遠く離れた工房間においてもなんらかの接触があり、全国的規模で同じ変化が導入されたのだと述べている。

ここまで2つのタイプについて述べてきたが、ウィレムズによるとこの他に4側面どこにも「オブジェクト・フリーズ」が見られないタイプ3の木棺も存在する。このタイプにおける主な装飾は「コフィンテキスト」であるが、胸側に偽扉や装飾的に表現されたヒエログリフが加わることもあった。例外的な様式ではあるが、中王国時代を通してエジプト全土において見られるという。そして、第12王朝後半のダハシュールにある王女の墓においてはタイプ3の木棺が一般的であったということだ。

(2) 描かれた物と意味

「オブジェクト・フリーズ」の持つ意味については、死後に必要とされる様々な物を示した副葬品の一覧表である可能性が指摘されている(Andrews 1984: 41; Snape 2011: 143)。さらにウィレムズは、「コフィンテキスト」の内容と一致する物があることから、一部はその挿絵としての役割を担っていたのであろうと述べている。そして、「オブジェクト・フリーズ」は単なる副葬品の絵ではなく、儀式における行為を概略して表現したものであるということも主張している。

以上のように、「オブジェクト・フリーズ」が持つ意味については様々な指摘がされているが、中でもウイ

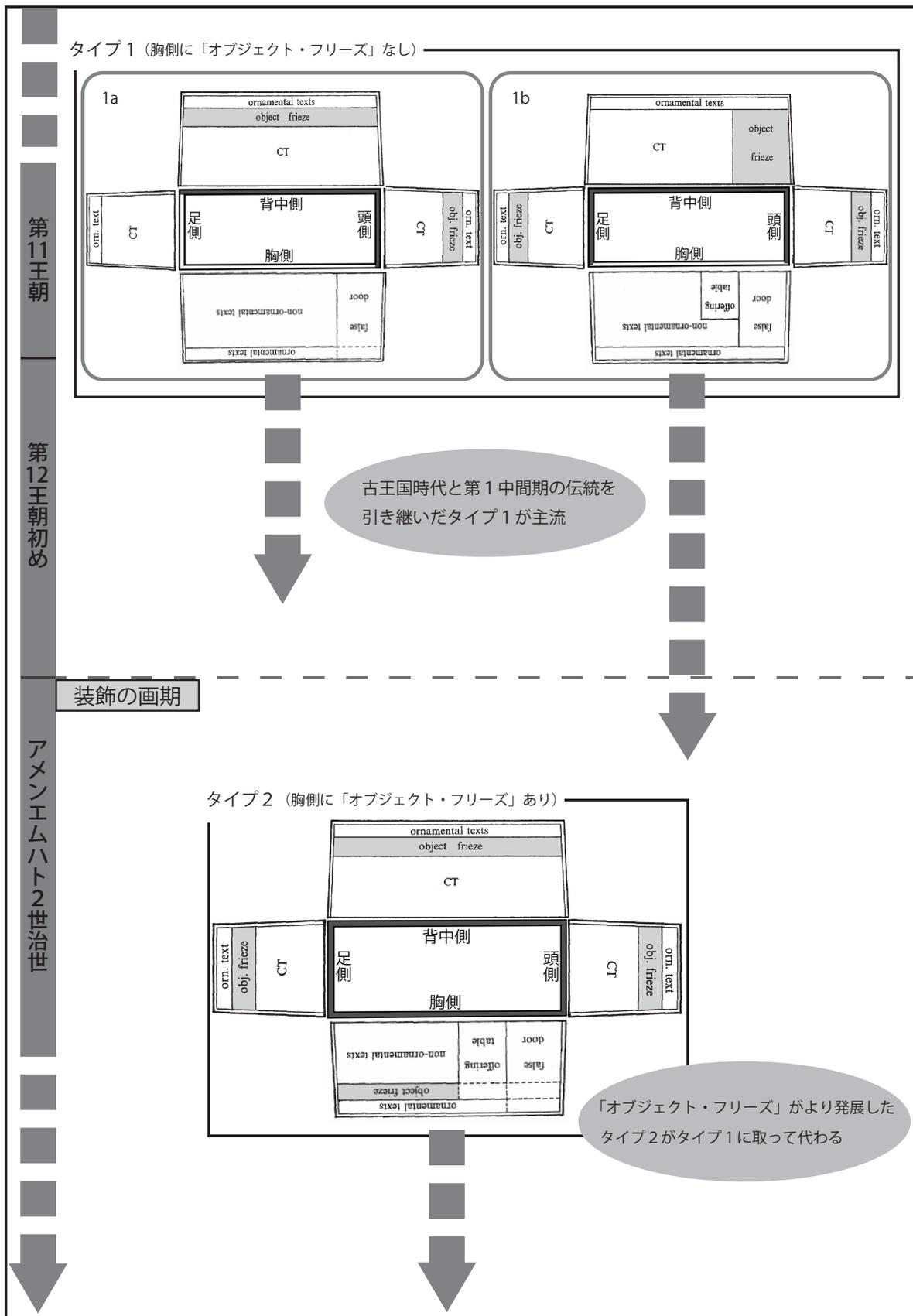


図2 タイプ1とタイプ2の木棺における装飾と年代 (Willems 1988: figs.19-21 の一部を引用して作成)
 Fig.2 Inner decoration and typology of Type 1 and Type 2 coffins (Coffin panels are after Willems 1988: figs.19-21)

レムズは儀式との関係を強く主張しており、詳しく述べている。まず、「オブジェクト・フリーズ」には7つの聖なる軟膏（油）壺、2袋の化粧用顔料（bags of eye-paint）など口開けの儀式で使われる物を中心に、さらにその他儀式で必要とされる物、そして埋葬に際して被葬者の身体に着けられたアミュレットなど、埋葬までに行われる儀式と関係する様々な物が描かれた。また、いくつかのアミュレットは「コフィンテキスト」においても言及されており、たとえばライオンのアミュレット (*h3t-amulet*) は、首に置くことで二度目の死からその人を護るという役割を担っていたことがテキストに書かれている。このように、「オブジェクト・フリーズ」は埋葬やそれに関わる儀式と強く結びついており、埋葬までに行われる一連の儀式を表現したものであるとウィレムズは考えている。つまり、「オブジェクト・フリーズ」は儀式を再現する役割を担っていたのである。

次に、ウィレムズの研究に従って木棺内側の4側面それぞれに描かれた物について見ていく。まず、頭側（図3）に描かれた主な物としては7つの聖なる軟膏（油）壺、2袋の化粧用顔料、枕が挙げられる。また、これに加えて儀式で使われる道具や香炉が描かれることもあった。これらは「ピラミッドテキスト」や供物リストの内容に由来すると考えられ、さらに口開けの儀式と深く関係するのである。

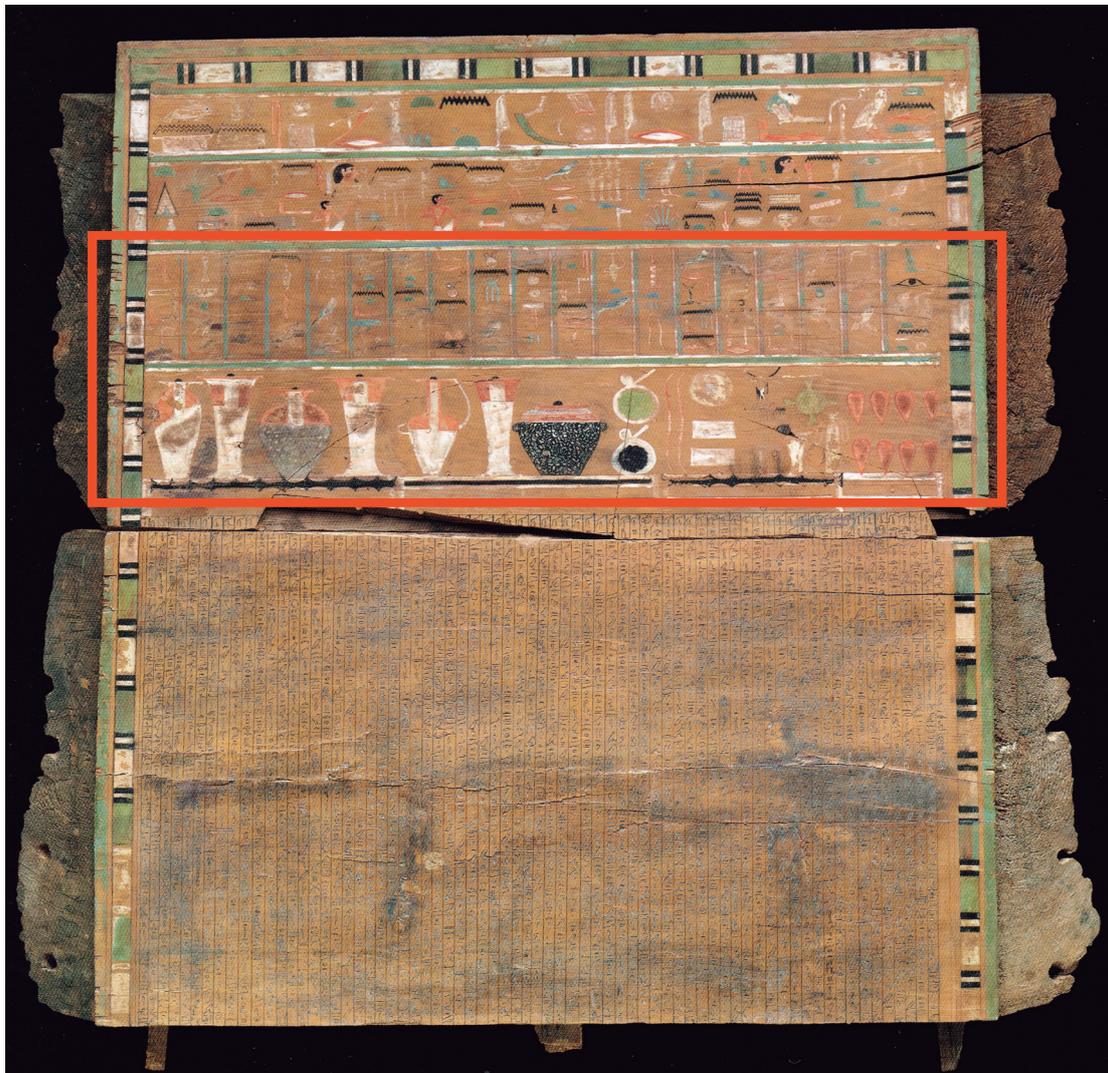


図3 頭側の「オブジェクト・フリーズ」(Freed et al. 2009: fig.69 一部加筆)

Fig.3 Head panel (interior view) of the coffin showing the *frise d'objets* (Freed et al. 2009: fig.69, with additions)

次に、足側にはサンダル、アंक (*ankh*) そしてその他儀式で使われる道具が描かれ、これらの道具は最初メンフィス地域で登場し、次第に南でも見られるようになるという。足側に描かれた物は頭側よりも種類が豊富であり、他の地域よりも精巧な「オブジェクト・フリーズ」が施されたバルシャでは、儀式と関連する物や日用品がさらに加えられたという。背中側と胸側は、両端側と異なり「オブジェクト・フリーズ」を描くスペースが豊富であったため、50以上の絵が描かれることもあった。まず、背中側には胸側よりも早く「オブジェクト・フリーズ」が施されるようになり、主に襟飾り (collar)、ブレスレット、エプロン、武器、笏、サンダルなどが描かれた。これらは基本的に、首、胸、腕に関係する物は頭に近い位置に描かれ、武器やサンダルは足に近い位置に配置されたということである。また、これらの絵はそれぞれ除外されることがあったが、特にタイプ1の木棺から襟飾りとブレスレットが除かれることは稀であった。最後に、胸側に「オブジェクト・フリーズ」が描かれるようになるのはアメンエムハト2世の治世頃からであり、鏡、襟飾り、ブレスレット、古王国時代の供物リストで言及されている武器や笏、そして書記の道具などが描かれた。胸側の特徴としては、「ピラミッドテキスト」や古王国時代の供物リストで言及されている物を重視して描かれるという点が挙げられるようである。

以上それぞれの側面に描かれた物について述べてきたが、これらの中には剃刀などの日用品も含まれており、儀式とは関係のないように思われる物もある。ウィレムズによるとこのような日用品は、第11王朝から第12王朝初めまで主流であったタイプ1の木棺において多く見られる。しかし、胸側に「オブジェクト・フリーズ」が描かれるタイプ2がタイプ1に取って代わった第12王朝半ば頃になると、襟飾りやブレスレット、化粧道具などの数が減少すると同時に、特に背中側において日用品が減り、王位の象徴や儀式に由来する物が新たに加わるという明確な変化が起こるのである。このような変化は、第12王朝半ばに死者とオシリスとの同一視が進み、つまり死者が王としての役割を強く持つようになってきていることを示唆している。しかし、ウィレムズはこの点に政治的な意味合いを持たせてはならず、特に関係は無いであろうと述べている。

以上から、「オブジェクト・フリーズ」は「ピラミッドテキスト」や供物リスト、「コフィンテキスト」との関係が非常に深く、儀式とは切り離せないものであったということが分かる。さらに、描かれる物には時代によって違いがあり、それはタイプ2の木棺が主流となる第12王朝半ばにおいて顕著に見られるということである。

3. 「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレット

本章ではまず、前章を踏まえた上で「オブジェクト・フリーズ」が持つ役割について「規範」や知識の所有という観点から捉え直す。そして、描かれた物の中でも特に装身具およびアミュレットを取り上げまとめる。

(1) 「オブジェクト・フリーズ」の役割—「規範」・知識の所有を示すもの—

前章で述べた通り、「オブジェクト・フリーズ」の持つ意味については、副葬品の一覧表としての役割と儀式を再現する役割という大きく2つが指摘されている。両者に共通する点として、「オブジェクト・フリーズ」には副葬品として重要視され、埋葬に際して必要とされた物が描かれたという点が挙げられる。つまり言い換えれば、「オブジェクト・フリーズ」は副葬品についてのいわゆる「規範」のような性格を持っているのではないかということである。また、「オブジェクト・フリーズ」には武器や化粧道具なども含まれるため、一見してそれは被葬者の性別によって描かれる物に偏りが生まれるように思われる。しかし実際は、「オブジェクト・フリーズ」が描かれるか否か自体には男女差が見受けられるが⁴⁾、描かれた物に男女差は特に

表れず、被葬者が男性であるからといって武器が多く描かれたり、女性であるからといって化粧道具が多く描かれたりということはない(Willems 1988: 50-51)。すなわち、地域差や時代差による違いはあるものの、「オブジェクト・フリーズ」には副葬すべき物がジェンダーの影響を受けずに描かれたということが示唆される。さらに、「オブジェクト・フリーズ」は被葬者が知識を所有していることを誇示する役割も担っていたと考えられる。「オブジェクト・フリーズ」と関係が深いものとして「コフィンテキスト」が挙げられるが、「コフィンテキスト」は古王国時代の「ピラミッドテキスト」と異なり王以外の人々が所有していたことから、それまでは王だけにしか開かれていなかった死後に永遠の生命を得る道が、中王国時代には王以外の人々にも開かれたといういわゆる「来世の民主化 (the democratization of the afterlife)」が起こったのだと言われていた。しかし、ヘイズ (Hays, H.) は来世で復活できるかどうかを葬祭に関わる文書を所有しているかどうかを求めるこの説に否定的であり、真に必要なとされたのは文書ではなく知識と儀式であると述べている (Hays 2011: 130)。つまり、「ピラミッドテキスト」や「コフィンテキスト」を有していることは、儀式における知識の所有を誇示しているのであり、逆に言えばそのような文書を持っていなくとも知識と儀式によって死後に永遠の生命を得られるということである⁵⁾。そして、前章で述べた通り「オブジェクト・フリーズ」に描かれた物の多くは儀式との関係が深いことが指摘されている (Willems 1988: 207)。また、王族など身分の高い被葬者であっても木棺に「オブジェクト・フリーズ」が描かれない場合がしばしば見られ、埋葬に際しての必須事項ではなかったことが推測される。したがって、「オブジェクト・フリーズ」もまた、儀式や副葬すべき物における知識の所有を単に誇示する役割を持っていたのだと考える。

以上、「オブジェクト・フリーズ」が持つ意味や役割について捉え直したが、すなわち「オブジェクト・フリーズ」とは、副葬すべき物を示す「規範」としての機能を持ち、そして儀式の再現を通して儀式についての知識を所有していることを誇示するものだということである。本稿では、特に「オブジェクト・フリーズ」の「規範」としての役割に焦点をあてて論じていく。

(2) 副葬すべき物として示された装身具およびアミュレット

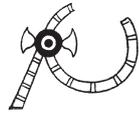
次に、「オブジェクト・フリーズ」に描かれた多様な物の中でも装身具およびアミュレットに注目し、それらは副葬品においていわゆる「規範」であったという視点から考察していく。

まず、「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレットについて、既往の研究 (Jequier 1921; Lacau 1904, 1906; Willems 1988) をもとにまとめ直すと、表 1⁶⁾・図 4～10 のようになる。ただし、これら全てが一つの木棺に描かれた訳ではなく、「オブジェクト・フリーズ」が占めるスペースの広さなどによって一部が選ばれ、主に背中側と胸側に描かれたのである。前章で述べた通り、中でも襟飾りやブレスレットが頻繁に描かれ、特にタイプ 1 の木棺でそれは顕著だということであった。

表 1・図 4～10 より、「オブジェクト・フリーズ」には非常に多彩な装身具およびアミュレットが描かれたということが見て取れる。そしてそれらを詳細に見ていくと、まず王あるいは王家の象徴 (royal insignia) に由来する物がいくつ含まれるということが分かる。たとえば、C5 のハヤブサあるいはハゲワシの襟飾りと H のヘッドバンドは主にウィレムズの言うタイプ 2 の木棺に見られ、L2 のビーズのエプロンなど伝統的な王の衣装はタイプ 1 の木棺においても多く見られる。つまり、「オブジェクト・フリーズ」は、「ピラミッドテキスト」に由来する物や、かつては王だけに限られていた王位の象徴である王冠や笏などを含むことが指摘されている (Willems 1988: 202-204) が、それは装身具およびアミュレットにおいても例外ではないということである。次に、全体的に見てペンダント、ネックレス、襟飾りと首に着ける装身具およびアミュレットが多いという点が指摘できる。古代エジプト人は、来世への道のりにおいて首は特に傷付きやす

表1 「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレット
Pl.1 Ornaments and amulets shown in the *frise d'objets*

<p><u>ヘッドバンド</u></p> <p>H: 多様な装飾がされた輪で表現される (sšd)</p>
<p><u>ペンダント</u></p> <p>P1: 赤色の樽形ビーズで、しばしば両端に緑色のビーズを伴う (swrt)</p> <p>P2: 緑色の管形 (あるいは樽形) ビーズで、しばしば両端に赤色のビーズを伴う (w3d)</p> <p>P3: 赤色でヘビの頭の形をしている (mnkbyt)</p> <p>P4: ライオンの頭と前脚部分の形をしており、カーネリアン製であるべきとされる (h3t)</p> <p>P5: ヒエログリフ  の形をしている (imnt)</p>
<p><u>ネックレス</u></p> <p>N1: 同じ形のビーズを連ねたもの (ct)</p> <p>N2: いくつもの形や色が異なるビーズを特に規則性なく連ねたもので、しばしばスカラベやウジャットの眼が含まれる (ct)</p> <p>N3: 貝の形をしたビーズを連ねたもの (wd3w)</p>
<p><u>襟飾り (collar)</u></p> <p>C1: 両端に半円形のターミナルを伴う (wsh)</p> <p>C2: 両端にハヤブサの頭のターミナルを伴う (wsh)</p> <p>C3: 金製の襟飾り (nbw)</p> <p>C4: 襟飾りの重さのバランスをとるための重り (m'nh)</p> <p>C5: 王の装身具に由来し、ハヤブサあるいはハゲワシの形をしている (wsh nrt など)</p> <p>C6: たくさんの小さいビーズで構成されたネックレスを両端でまとめたもので、様々な形のビーズで装飾された重りが伴う (mnit)</p>
<p><u>ブレスレットあるいはアンクレット</u></p> <p>B1: 幅の広いブレスレット / アンクレット (mnfrty/srwy)</p> <p>B2: 幅の狭いあるいは一連のブレスレット / アンクレット (ctnt など)</p> <p>B3: カーネリアンまたはアメジスト製で右腕に着けるべきとされたビーズ (hp'ct)</p>
<p><u>伝統的な王の衣装 ("Lower Egyptian" costume)</u></p> <p>L1: しっぽ (mnkrt など)</p> <p>L2: ビーズのエプロン (bs3)</p> <p>L3: ツバメの形をしておりしばしば背中に円盤を伴う (s3t)</p>
<p><u>アミュレット</u></p> <p>Am1: ハヤブサの形をしている</p> <p>Am2: ヒエログリフ  の形をしていて、足の下に置くことが指示されている (ctnh)</p> <p>Am3: 結び目のような形をしている (tit)</p> <p>Am4: 輪の形あるいは輪の下に横棒を伴う (ctnh 33w)</p> <p>Am5: コブラの形をしている (jct など)</p> <p>Am6: ハゲワシの形をしている (nrt など)</p>



H

図4 ヘッドバンド

Fig.4 Headband (Lacau 1906: fig.491)



P1



P2



P3



P4



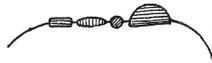
P5

図5 ペンダント

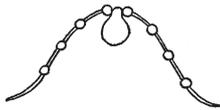
Fig.5 Pendants (Lacau 1906: figs.445, 454, 463, 92, and P5 is after Willems 1988: table13 redrawn)



N1



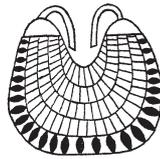
N2



N3

図6 ネックレス

Fig.6 Necklaces (Lacau 1906: figs.457, 456, 467)



C1



C2



C3



C4



C5



C6

図7 襟飾り

Fig.7 Collars (Lacau 1906: figs.429, 430, 434, 440, 472, and C5 is after Garstang 1902: pl.26 redrawn)



B1



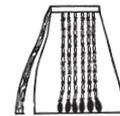
B2



B3



L1



L2



L3

図8 ブレスレットあるいはアンクレット

Fig.8 Bracelets and anklets (Lacau 1906: figs.425, 437, and B3 is after Willems 1988: table13 redrawn)

図9 伝統的な王の衣装

Fig.9 "Lower Egyptian" costume (Lacau 1906: figs.408, 400, 95)



Am1



Am2



Am3



Am4



Am5



Am6

図10 アミュレット

Fig.10 Amulets (Lacau 1906: figs.96, 115, 112, 90, 100, and Am3 is after Jequier 1921: fig.854 redrawn)

い体の部分であると考えた (Pinch 1994: 111-112) ため、これらの首に着ける物が「オブジェクト・フリーズ」には多く含まれ、「規範」として示されたのだと考える。さらに、その中でも襟飾りが重要視されたということが推測される。表1・図4～10においてはターミナル⁷⁾の形を主な基準として分け、材質での分類はC3の金製のもの以外は考慮しなかった。しかし、材質や名前によってさらに細分すると、実際は10種類以上の襟飾りが「オブジェクト・フリーズ」には描かれたのである (Mace and Winlock 1916: 65)。したがって、副葬品として様々な材質・色の襟飾りを入れることが理想的であるとされたのではないだろうか。また、ペンダントには赤色が多いということも指摘できる。表1で挙げた5つのペンダントのうち、3つがカーネリアン製であることが示されているかあるいは赤色で描かれているのである。P1の赤色をしたスウェルトビーズ (*swrt*) と共に描かれることが多く形態も類似しているペンダントとして緑色のP2が挙げられるが、実際に出土するのも、人形木棺やマスクの首に描かれるあるいは象嵌されるのも専ら赤色のスウェルトビーズの方なのである⁸⁾。つまりこれは、類似する2つのペンダントであっても、緑色より赤色の方が好まれたということを示唆している。さらに、新王国時代においても赤色志向は変わらなかった。たとえば、「死者の書」においてもいくつかの装身具およびアミュレットが言及されているが、その中で結び目の形をしたティト (*tii*) はやはり赤色の貴石で首の位置に置くことが指示されている。また、「オブジェクト・フリーズ」に描かれたP3つまり赤色でヘビの頭の形をしているペンダント (*mnkbyt*) は、新王国時代の墓の壁画にも赤色で描かれ、さらに同時代からの出土例も多いのである⁹⁾。このような色の志向は、元々慣習であったかあるいは当初からその色に意味を込めていたと思われる。しかし、いずれにせよ赤色であるべきことが葬祭に関する文書に示されることによって、それは「規範」という確固としたものとなり、中王国時代以降「コフィンテキスト」や「オブジェクト・フリーズ」が姿を消した新王国時代においても、ペンダントにおける赤色志向は継承されていったのだと考える。

以上「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレットについて見てきたが、非常に多種多様なものが描かれたということや、いくつかは王や王家の象徴に由来するということが判明した。また、首に着けるタイプの装身具およびアミュレットが多いのは古代エジプト人独自の考えに起因するということ、そして色といった細かい点も「コフィンテキスト」や「オブジェクト・フリーズ」で示されることによってそれは「規範」としての性格を帯び、中王国時代以降も継承されていくのだということも指摘した。

4. 出土遺物との比較

ここでは、前章で提示した「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレットと実際の出土遺物との比較・考察をおこなっていく。

本稿では、「オブジェクト・フリーズ」と一つの墓から出土した装身具およびアミュレットとの比較をすることで、一人の被葬者がどの程度あるいはどのように「規範」を遵守していたのかを知ることが目的であるため、対象とする墓は未盗掘であることが望ましい。また、その中でも特に装身具およびアミュレットについて詳細な報告がされている墓が分析対象として有効であると考えられる。そこで今回は、中王国時代の墓の中でもほぼ未盗掘で、とりわけ詳細な報告がされているセネブティシ (Senebtisi) の墓を分析対象の軸に据える。さらにそれに加えて、未盗掘で発見され装身具およびアミュレットについて詳細に報告されているウアフ (Wah)、ナガ・エッデイル (Naga ed-Deir) に埋葬された名前不明の女性の墓を分析対象とし比較をおこなう。

まず、セネブティシは第12王朝末頃リシュトに埋葬された非常に身分の高い女性である。ほぼ未盗掘のまま発見された墓からは、多数の土器や笏、カノポス壺などが出土した (Mace and Winlock 1916)。しか

し、セネブティシは「家の女主人 “lady of the house”」の称号を有しているという以外は、どのような人物であったかはよく分かっていない。土器に「クイーンズウェア (“queen’s ware”）」が含まれていないことなどから、王族ではなかったと思われるが、社会階層が非常に高かったことは明確である (Grajetzki 2014 : 34-35)。次に、ウアフは第 12 王朝初め頃テーベに埋葬された「貯蔵所の監督官 “overseer of the storehouse”」の称号を持つ男性である。未盗掘で発見され墓からは食べ物の供物が出土し、木棺からは精巧に作られたミイラが見つかった (Roehrig 2003)。最後に名前不明の女性とは、第 11 王朝後半にナガ・エッデルに埋葬された社会階層が高くないと思われる女性である (Freed et al. 2009: 52)。この女性は、未盗掘の墓 (N453b) から装身具およびアミュレットを身に着けた状態で発見された (Eaton 1941)。また、今回対象とする 3 人の被葬者は誰も「オブジェクト・フリーズ」を所有していないが、前章で指摘した通り、そこに描かれた物事についての知識があれば良いと考えるため、それぞれの墓から出土した遺物と、「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレットを網羅的に示した表 1 とを比較するという方法をとる。

以上を踏まえて、まず表 2¹⁰⁾ には表 1 で示したいわゆる「規範」に挙げられている物を副葬品として実際に所持しているか否かを示し、さらにそのうち 3 人の被葬者いずれかが所有している装身具およびアミュレットについてはそれぞれの出土数を図 11¹¹⁾ に示した。

まず表 2 より、「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレツ

表 2 「規範」と実際に出土した装身具およびアミュレットとの比較
Pl.2 Comparison between the *frise d'objets* and burial goods (ornaments and amulets)

	セネブティシ	ウアフ	名前不明の女性
H 	○	—	—
P1 	○	○	—
P2 	—	—	—
P3 	—	—	—
P4 	—	—	—
P5 	—	—	—
N1 	○	○	○
N2 	—	○	—
N3 	○	—	—
C1 	○	○	—
C2 	○	—	—
C3 	○	—	—
C4 	—	—	—
C5 	—	—	—
C6 	—	—	—
B1 	○	—	—
B2 	—	○	○
B3 	—	—	—
L1 	○	—	—
L2 	○	—	—
L3 	○	—	—
Am1 	—	—	—
Am2 	—	—	—
Am3 	—	—	—
Am4 	○	—	—
Am5 	—	—	○
Am6 	—	—	—

トのうち何種類を副葬品として所有しているのかを見てみると、セネブティシが12種類と最も多く、中にはヘッドバンドや伝統的な王の衣装など王位の象徴に由来する物が多く含まれるということが分かる。続いてウアフの5種類、そして名前不明の女性が3種類と最も少なかった。この結果から、今回扱った被葬者の中では、セネブティシが最も副葬すべき物についての知識を所有している社会集団に属していたと考えられ、対してウアフと名前不明の女性は「規範」をそれほどには知らなかったか、あるいは知っているもそれを実際の副葬品にあまり反映させることが出来ない社会集団に属していたのだと推測する。しかし、ウアフは埋葬のされ方やマスクを着けていたことから比較的社会的階層は高く、さらにセネブティシと同じくP1と「オブジェクト・フリーズ」において重要視されたと思われるC1を所持しているため、セネブティシほどではないとしても儀式や副葬すべき物についての知識を相当有していた人々によって埋葬されたと考えられる。したがって、ウアフと名前不明の女性の間にも明確な差があったと思われる。つまり、セネブティシ、ウアフ、名前不明の女性という順でより多くの知識を所有し、且つそれを実際の埋葬に反映できる社会集団に属していたと考えられるのである。ただし、名前不明の女性がAm5を所持していることを考慮すると、彼女が属していた社会集団が「規範」についての知識をほとんど所有していなかったということではなかったようである。また、ウィレムズの言うタイプ2の「オブジェクト・フリーズ」からは、タイプ1と比べて襟飾りやブレスレットの数が大幅に減少したということであったが、タイプ2が主流であった時代に埋葬されたセネブティシは両方とも所持しており、表2を見ると特に襟飾りは3種類も所有していることが分かる。つまりこれは、一度「規範」として示されると、その物は時代によって「オブジェクト・フリーズ」に描かれる頻度に差が出たとしても、変わらず重要視され続けるということを示唆している。

次にそれぞれの出土数を示した図11を見てみると、「規範」に挙げられている装身具およびアミュレットのうち、セネブティシは多くの種類を少数ずつ所持している一方で、ウアフは網羅している種類は少ないものの、特定の物を集中的に多く所持しているということが分かる。この結果より、セネブティシは「規範」の遵守において、より多くの種類を副葬品として取り入れることを重視していたのに対して、ウアフは種類よりも量に重点を置いていたと考えられる。特にウアフはブレスレットおよびアンクレットの数が非常に多く、襟飾りを重要視していたと思われるセネブティシとは異なる様子がうかがえる。名前不明の女性においてもウアフのような状況が見て取れ、やはりブレスレットおよびアンクレットが多く出土している。以上か

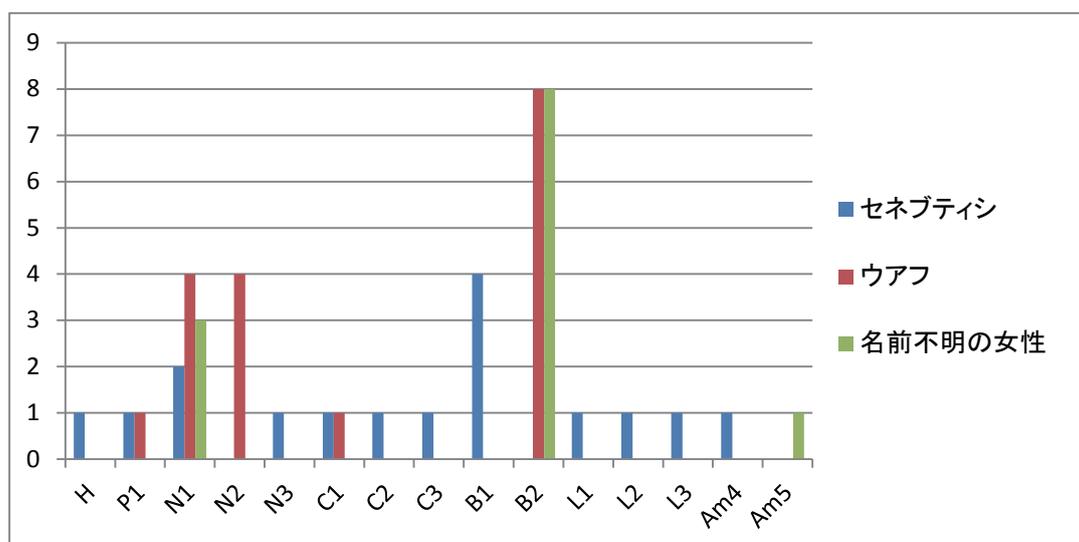


図11 「規範」通りの装身具およびアミュレットにおけるそれぞれの出土数

Fig.11 Number of the ornaments and amulets keeping the "norm"

ら、被葬者によって「規範」の遵守において価値を置く点が異なっていたということが分かる。クーニー (Cooney, K.M.) は、ラメセス朝時代の木棺には被葬者の経済状況によって重視した部分が異なっていることが表れており、経済状況や受けてきた教育など個人の境遇が埋葬には強く反映されるのだと述べている (Cooney 2007: 287)。したがって本稿の場合も、3人の被葬者がどのように副葬品における「規範」を遵守していたかには、彼らの経済状況をはじめ個人の身の上が大きく影響したと考える。

しかし、より多くの種類を副葬品として取り入れようとしたであろうセネブティシにおいても、「オブジェクト・フリーズ」に示された装身具およびアミュレット全てを実際に所有している訳ではない。上述した通り、「規範」の中にも特に重要視された物があり、それらにはセネブティシとウアフ両者が所有していたP1と襟飾り、そしてどの被葬者も所有しており、複数個出土することもあるネックレスとプレスレット、アンクレットが挙げられる。そしてこれは、首に着ける物や襟飾りの種類が多く、プレスレットあるいはアンクレットが除かれることは稀であるというその物の重要性を示唆する「オブジェクト・フリーズ」の特徴に当てはまる。セネブティシの場合は、これら主要な物を網羅した上で、さらに「規範」に沿って王位の象徴に由来する装身具およびアミュレットを副葬品として取り入れているのである。

3基の墓から出土した装身具およびアミュレットは、以上のような「規範」に挙げられている物が大半であった。しかし、少数ではあるものの「規範」に沿っていない物も出土している。最後にこれらの装身具およびアミュレットについて述べることにする。まず、セネブティシの墓からは98個もの小さな花の形をした金製の髪飾りが頭近くの樹脂から出土している (Mace and Winlock 1916: 59)。さらに多彩色のビーズで構成されたベルトも出土しており、これは実際に日常で身に着けていた物であると指摘されている (Mace and Winlock 1916: 70)。一方、「規範」に合致して出土したセネブティシの襟飾りやプレスレットは明らかに実用的ではない¹²⁾。すなわち、襟飾りやプレスレットは「オブジェクト・フリーズ」に示された「規範」を意識し、副葬を目的として製作されたのに対して、「規範」に合致しない装身具およびアミュレットは、日常で愛用していた物をそのまま副葬品に利用したと推測できるのである。また、名前不明の女性の墓からは貝製ビーズで作られたベルトが出土しているが、貝のベルトは特に女性を護るものと信じられていた (Grajetzki 2014: 127)。以上のような装身具およびアミュレットは、被葬者のジェンダーを反映しており、主にアイデンティティを示す役割を担っていたと考えられる。ウアフの墓からは、スカラベの指輪以外は「規範」に当てはまらない装身具およびアミュレットは出土しておらず、これは被葬者が男性であることに起因すると思われる。以上より、「規範」に合致しない物の方が、装身具が持つアイデンティティの主張という意味を強く帯びているとすることができる。

5. おわりに

本稿において分析対象とした3人の被葬者は、埋葬方法や副葬品の量および質から考えて、セネブティシ、ウアフ、名前不明の女性の順で属していた社会階層が高かったと想定される。そのような社会階層の違いを踏まえた上で、中王国時代の「オブジェクト・フリーズ」を副葬品における「規範」と捉え、そこに描かれた装身具およびアミュレットと実際の出土遺物とを比較したところ、「規範」は被葬者によって遵守の志向が異なるということが分かった。今回の分析では、「規範」に挙げられている物のうちより多くの種類を実際の副葬品に取り入れようとするセネブティシに見られる志向と、種類ではなくある特定の物を集中的に多く取り入れようとするウアフおよび名前不明の女性に見られる志向が確認された。さらに、前者は襟飾りに、後者は特にプレスレットおよびアンクレットに比重を置いていたようである。以上の分析結果より、社会階層が比較的低い被葬者であっても「規範」の範囲から副葬品が選択され、そして様々な種類の物を所有でき

ない代わりに同じ物を複数個所有するという「取捨選択」が行われていることが分かった。

しかし、本稿では地域差・時代差をほとんど考慮していないという点や、分析対象が非常に少ないという点が特に問題点として挙げられる。したがって今後は、データの集成および分析をより詳細におこない、本稿に欠落している地域差・時代差も含めて考察していくつもりである。

謝辞

本研究ノートを作成するにあたり、指導教授である早稲田大学文学学術院近藤二郎先生に感謝いたします。早稲田大学エジプト学研究所の馬場匡浩氏には、着想の段階から丁寧かつ熱心なご指導を賜り、また同研究所の矢澤健氏には、多数の有益なご指摘を頂きました。心より感謝いたします。

註

- 1) 古代エジプトにおける装身具とアミュレットを明確に区別することは非常に難しい。なぜなら、装身具のほとんどは、身体を飾る役割の他にアミュレットとしての役割も持っていたからである (Hayes 1953; Pinch 1994; Aldred 1971; Andrews 1990)。たとえば、王朝時代を通して身に着けられた襟飾り (collar) は、死者を護るアミュレットとしての役割を担っていたことが指摘されている (Petrie 1914; Aldred 1971)。逆に、アミュレットとしての意味を強く帯びたスカラベやウジャトの眼は、時に指輪やブレスレットの一部となり、装身具としての側面を持つのである。そこで本稿では、あえて両者を特に区別はせず、装身具およびアミュレットと称することで、それら全般を指すこととする。
- 2) 本章において特に出典が明記されていない文章の内容は全て Willems 1988 に依拠する。
- 3) 古王国時代末より、被葬者は棺の中に左脇を下にして、頭位方向が北、そして体の正面は東側 (つまり棺の側面) を向くように入れられた (Snape 2011: 140-141)。中王国時代においてもこの埋葬姿勢がとられたため、「オブジェクト・フリーズが胸側に無い」とは棺の内側において、被葬者の体の正面が向いている側面に「オブジェクト・フリーズ」が見られないという意味である。
- 4) 女性よりも男性の被葬者の木棺に「オブジェクト・フリーズ」は描かれることが多かったようである (Willems 1988)。
- 5) 葬祭文書によって来世で復活できるのであれば、中王国時代において「コフィンテキスト」を所有していない王には来世への道が開かれていないことになってしまう (Hays 2011)。
- 6) P1, P2, N1, N2 はしばしばブレスレットあるいはアンクレットとして描かれることがある。しかし大半は首に着けるものとして描かれる。P4, P5, B3, は「コフィンテキスト」において言及があり、P4 と B3 は材質・置く位置、P5 は置く位置が指示されている。また、襟飾りと B1 あるいは B2 も「コフィンテキスト」で言及されている可能性がある (Willems 1988; Faulkner 1973, 1977, 1978)。伝統的な王の衣装とは、パッチの言う “Lower Egyptian” costume を指す。表中の「アミュレット」とは、ペンダントやネックレスなどの形状で出土することはあるものの、中王国時代の葬祭に関する文書においては特に首や腕などに着けることが示されていないものである。Am4 は足の下に置くことが指示されているが、アンクレットとは異なるためアミュレットに分類した。
- 7) 襟飾りの両端に付き、ビーズの束をまとめる役割を果たす。半円形やハヤブサの頭の形をしたものが一般的である。
- 8) MMA 11.150.15, 12.183.25, 25.3.252, 22.1.271, 34.1.118, 34.1.158, Freed et al. 2009, fig.22 など。
- 9) MMA 64.271, EA 64843, 3128 など。
- 10) その物を所有している場合は「○」、所有していない場合は「—」で示した。
- 11) 表2においてどの被葬者も所持していなかった物に関してはこの図には含めなかった。N1 と N2 は、ブレスレットあるいはアンクレットとして「オブジェクト・フリーズ」に描かれる場合がある。本図においては、ウアフの N2 のうち3つはブレスレットの形態をしている。また、B2 には B1 のように何重ものビーズの連なりで構成されたものと、1連のみで構成されたものがある。ウアフの8つはどれも3重なのに対して名前不明女性の8つは全て1連のものである。
- 12) 襟飾りは材質が脆すぎ重りが無い点、ブレスレットとアンクレットは小さすぎる点で実用的でない。

参考文献

- Aldred, C.
1971 *Jewels of the Pharaohs*, London.
- Andrews, C.
1984 *Egyptian Mummies*, London.
1990 *Ancient Egyptian Jewellery*, London.
1994 *Amulets of Ancient Egypt*, London.
- Cooney, K.M.
2007 “The Functional Materialism of Death: a Case Study of Funerary Material in the Ramesside Period”, in M. Fitzenreiter (ed.), *Das Heilige und die Ware*, IBAES VII, London, pp.273-299.
- Eaton, E.S.
1941 “A Group of Middle Kingdom Jewellery”, *Bulletin of the Museum of Fine Arts* 39, no.236, pp.94-98.
- Faulkner, R.O.
1973 *The Ancient Egyptian Coffin Text: Volume I Spells 1-354*, Warminster.
1977 *The Ancient Egyptian Coffin Text: Volume II Spells 355-787*, Warminster.
1978 *The Ancient Egyptian Coffin Text: Volume III Spells 788-1185 and Index*, Warminster.
2010 *The Ancient Egyptian Book of the Dead*, rev.ed., London.
- Freed, R.E., L.M. Berman, D.M. Doxey and N.S. Picardo.
2009 *The Secret of Tomb 10A Egypt 2000BC*, Boston.
- Garstang, J.
1902 *El-Arabah, a Cemetery of the Middle Kingdom: Survey of the Old Kingdom Temenos: Graffiti from the Temple of Sety*, London.
- Grajetzki, W.
2006 *The Middle Kingdom of Ancient Egypt*, London.
2014 *Tomb Treasures of the Middle Kingdom: The Archaeology of Female Burials*, Philadelphia.
- Hayes, W.C.
1953 *The Scepter of Egypt I: From the Earliest Times to the End of the Middle Kingdom*, New York.
- Hays, H.M.
2011 “The Death of the Democratisation of the Afterlife”, in Strudwick, N. and H. Strudwick (eds.), *Old Kingdom, New Perspectives: Egyptian Art and Archaeology 2750-2150 BC*, Oxford, pp.115-130.
- Jéquier, G.
1921 *Les Frises d'objets des sarcophages du Moyen-Empire*, Cairo.
- Lacau, P.
1904 *Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire vol.I*, Cairo.
1906 *Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire vol.II*, Cairo.
- Mace, A.C. and H.E. Winlock
1916 *The Tomb of Senebtisi at Lisht*, New York.
- Patch, D.C.
1995 “A “Lower Egyptian” Costume: Its Origin, Development, and Meaning”, *Journal of the American Research Center in Egypt* 32, pp.93-116.
- Petrie, W.M.F.
1914 *Amulets*, London.
- Pinch, G.
1994 *Magic in Ancient Egypt*, London.
- Roehrig, C.
2003 “The Middle Kingdom Tomb of Wah at Thebes”, in Strudwick, N. and J.H.Taylor (eds.), *The Theban Necropolis: Past, Present and Future*, London, pp.11-13.
- Snape, S.
2011 *Ancient Egyptian tombs: the Culture of Life and Death*, Oxford.
- Willems, H.
1988 *Chest of Life: A Study of the Typology and Conceptual Development of Middle Kingdom Standard Class Coffins*, Leiden.
- 杉並希子
2005 「イドットのマスタバ墓埋葬室の供物リストについて」『オリエント』第48巻第1号、日本オリエント学会 pp.88-116.

エジプト学研究 第20号

2014年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.20

Published date: 31 March 2014

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University